
大和撫子七変化

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大和撫子七変化

【Nコード】

N8952P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

雄大は交際している如月美奈先輩にぞっこん。そのファッションの二つ一つにもう。女の子の様々な衣装がテーマの作品です。

第一章

大和撫子七変化

三宅雄大はだ。かなり大変なことになっていた。

やや切れ長で少し上に向いた二重の目が涼しげである。細い顔は特に頬のラインがそうなっている。鼻は大きく肌は白い。茶色の髪をブローさせた細身の長身の持ち主だ。

外見はいい。ブレザーの制服もよく似合っている。しかしであつた。

「如月先輩っていいよなあ」

「ああ、三年の」

「あの人が」

「本当にいいよな」

こうクラスメイト達に言うのである。今の彼の彼女である。

「いや、勇気出して告白してよかったよ」

「それはよかったな」

「それはな」

周りは彼のその幸運は喜んだ。

「けれどな」

「けれど？何だよ」

「御前浮かれ過ぎだろ」

「先輩と付き合えて」

「そんなに嬉しいか？」

「そこまでか」

「ああ、嬉しいよ」

実際にそうだと返す彼だった。

「嬉しいよ」

「それもわかった」

「それもな」

周りはその喜びも認めた。

「ただな。もう先輩が本当に好きなんだな」

「好きで好きで仕方ないんだな」

「そうなんだな」

「そうさ。本当に全部好きなんだよ」

「こうまで言っただ。ここから思いきりのろけるのだった。」

「あれだよ」

「あれ？」

「今度は何だよ」

「先輩って綺麗でスタイルがいいだろ」

「その先輩の話をするのだった。」

「何着ても似合うからなあ」

「まあなあ」

「制服の着こなし上手だよな」

「確かに」

「そうだろ？ほら、見てくれよ」

丁度学校のグラウンドでだ。女生徒達が出ていた。そこにいたのはだ。

背は一六七位で胸はかなり大きい。綺麗な黒髪を後ろで束ねている。目は吊り目で大きい。引き締まった口元をしている。白い肌でスタイルは胸以外に脚も腰も見事なものだ。上は白い体操服、下は黒の半ズボンという格好だ。白いソックスが映える。

「如月美奈先輩だよ」

「体操服姿似合うよな」

「全く」

「それは確かだよな」

「周りも頷くことだった。」

「背が高いしスタイルもいいから」

「それにあの胸」

「そうだよな」

必然的に視線は胸に向かう。

「どれだけあるかな」

「九十あるんじゃないのか？」

「九十か」

一口に言えるがだ。それはかなりの大きさだった。嫌でも目立つ、そこまで達している。

「それでウエストは五十八」

「凄いな、それも」

「ヒップは九十かな」

「安産型だな」

「おまけにあの脚だ」

脚まで言われる。すらりとして形がいい。

「まさにパーフェクト」

「よくあんな凄い人彼女になったよな」

「おまけに体操服の着こなしもいいしな」

「贅沢を言えばな」

一人がこんなことを言った。

「ブルマーだったらもう戦略兵器クラスの威力だったんだけれどな」

「もう何処もブルマーじゃないからな」

「そうだよな」

実は彼等も実際にその目でブルマーを見たことはない。彼等が小学校に入る頃からかなり少なくなっていて今はもう絶滅種と言ってもいい。

第二章

「まああの体操服姿でもな」

「凄い威力だよな」

「全く」

「それだけじゃないしな」

ここで雄大が言った。

「制服姿とかも。凄いしな」

「やれやれ、何でもいいのかよ」

「のろけてる、もうな」

周りはそんな彼に呆れる。そうしてだ。

この日の放課後彼は学校の校門のところまで待ち合わせをした。やがてそこにだ。美奈が優しい笑顔でやって来たのである。

青いスカートに白いブラウス、ブレザーはスカートと同じ青だ。ネクタイは緑である。学者のそれとベレーを合わせたような帽子はこの学校の女子の制服の一つだ。短いスカートからやはりあの脚が見えている。

その姿で来てだ。雄大に言うのだった。

「待ったかしら」

「いえ」

「待ってないのね」

「はい、今来たばかりです」

こう美奈に話す。目が少しだけ脚と制服の上からもわかる見事なウエストと胸に行く。男としてそれはどうしても避けられなかった。

「ですから」

「そうだったらいいけれど」

「本当にそうですから」

こう少し強引に言うのだった。

「気にしないで下さい」

「そうなのね」
「はい。それで先輩」
「何？」
「これから図書館ですか？」
赤くなつた顔で美奈に問うた。
「また。勉強で」
「そのつもりだけれど」
「受験大変なんです」
「大学はもう受かつてるわよ」
「あつ、そうでした」
雄大も言われてこのことに気付いた。
「八条大学でしたよね」
「そうよ、そこよ」
「推薦で入つたんですよ」
「八条大学には入りたかつたしね」
吊り目だがそれでも。その笑みは優しく包容力のあるものである。年下の彼氏に対して向けるのに相応しい笑みであった。
「家からも通えるし」
「そうですね。この学校と近いですしね」
「だから。よかつたわ」
通学の弁も考えていいというのだった。
「本当にね」
「俺も八条大学受けますから」
「ここで雄大はまた話した。」
「絶対に」
「雄大君もなのね」
「はい、そうします」
雄大は明るい、やや力んだ言葉で応えた。
「本当に」
「それじゃあ待ってるから」

「待つてくれるんですね」

「ええ、待つてるから。けれど」

「けれど？」

「離れないからね」

こう雄大に告げる。

「一緒にね。いましょう」

「はい、一緒に」

「それでけれど」

また話してだった。美奈はここでこんなことも言った。

「ねえ」

「はい？」

「今度の日曜だけれど。時間あるかしら」

「はい、あります」

日曜は暇だった。彼は部活はしていない。アルバイトをしている。

カラオケ屋の下のゲームセンターでだ。店員をしているのである。

「それじゃあ」

「じゃあその日デートしましょう」

「デートですか」

「そう、デートね」

それをだというのである。

第三章

「それでどうかしら」

「御願います」

わかりました、ではなかった。出て来たのはこの言葉だった。

「是非」

「そういうことでね。待ち合わせ場所はね」

そのことについても話す美奈だった。こうして二人はデートすることになった。待ち合わせ場所も時間も彼女が決めた。そうしてであつた。

雄大はその日曜に待ち合わせ場所に来た。そこは駅前の本屋の中である。そこに来たのである。

その本屋は中々繁盛していた。客が多く本も多い。棚に満ちている本も目に入るが今の彼はそれよりも彼女を探していた。店の中を見回していた。

「ええと、先輩は」

「今終わるからね」

ここで美奈の声が聞こえてきた。そちらに振り向くとだ。

美奈がいた。しかしその服はだ。いつもの制服ではなかった。

エプロンをしていた。赤いエプロンをしていた。そのエプロン姿でも胸が目立つ。その姿で雄大に対して言ってきたのである。

「実はこのお店でアルバイトはじめたのよ」

「そうだったんですか」

「そうよ。今タイムカード押してお店出るから」

「わかりました。ただ」

「ただ？」

「似合いますね」

そのエプロン姿に対する言葉である。

「本当に」

「お世辞はいいわよ」

「いえ、お世辞じゃないです」

雄大は本気だった。

「お世辞じゃないですから」

「そう言ってくれるのね」

美奈はここでも微笑んだ。

「有り難う」

「本気なんだけれどな」

今の雄大の言葉は美奈には聞こえなかった。

「まあいいか」

「それじゃあ行きましょう」

そんな雄大をよそにだ。美奈は彼に告げた。

「デートにね」

「はい」

美奈はすぐに店の中に入って雄大の前に帰ってきた。エプロンを脱ぐと今度は赤い上着に白いコート、それと黒いスカートだった。

スカートはひらひらとした丈の短いもので生脚だった。

その姿を見てだ。雄大は思わず溜息をついてしまった。

「うわっ……」

「うわって？」

「凄く似合ってますね」

その彼女の今の服を見ての言葉だ。

「最高ですよ」

「だからお世辞はいいわよ」

「お世辞じゃないですから」

このことをまた断る彼だった。

「お世辞なんか言いませんから」

「そうなの？」

「そうですね。本当に似合ってます」

その顔も声もうっとりときえしていた。

「先輩って綺麗ですよ、いつも思ってますけれど」

「褒め過ぎよ。恥ずかしいわ」

実際に頬を赤らめさせる美奈だった。

「そこまで言われたら」

「すいません、けれど」

「とにかく行きましょう」

彼にデートをはじめるときにまた言ってきた。

「いいわね、それじゃあ」

「はい、わかりました」

こうしてだった。二人でデートに向かう。美奈がリードしてまづは街の商店街を歩く。それから彼女が雄大を連れて来た場所は。

「ええと」

「何？」

「ここですか」

二人はプールの前にいた。そこで美奈に対して尋ねた。

「次はここですか」

「そうよ。泳げるわよね」

「あの、プールって」

「最初から考えてたの」

美奈は雄大に対してにこりと笑って告げた。

第四章

「このデートでプールに行こうって」

「そうだったんですか」

「そうよ。それじゃあ中にね」

雄大は言われている間ずっと美奈の水着姿について考えていた。その抜群のスタイルがどんなものか見たくて仕方がなかった。一体どんな水着を着るのかも関心があった。しかしだ。

自分のことも考えてだ。戸惑ってしまった。

「けれど」

「けれど?」

「俺水着持ってませんけれど」

「こつ言っただった。」

「それで泳ぐのは」

「中で買えるわよ」

ところが美奈がこつ言ってきた。

「そこでね。安いし」

「安いですか」

「そうよ、安く買えるから」

にこりと笑って雄大に話す。すると彼も負けてしまった。

そしてだ。ついつい頷いてしまった。それからだった。

プールの中に入って水着を買った。そのうえで着替えてプールサイドに出る。緑の床に水色の底のプールよりもだ。やはり美奈だった。

しかし今彼女の姿は見えない。何処かと探すとだった。

「お待たせ」

また声がかかってきた。あの声だ。

そちらに振り向くとだ。美奈がいた。その姿は。

「えっ……」

「また驚いたの？」

「何ていうか」

勿論彼女は水着だ。その水着は競泳水着だった。黒と青の配色もいい。だがその水着は彼女のスタイルをこれまでになくはつきりと浮き立たせていた。

それを見てだ。呆然となっていたのである。

「あの、競泳水着って」

「似合うかしら」

「何て言えばいいんでしょうか」

これが彼の言葉だ。

「その、それは」

「目のやり場に困る？」

美奈はくすりと笑って雄大に問うた。

「若しかして」

「言ったら何ですけれど」

「やっぱりね。それじゃあね」

「それじゃあ？」

「泳ぎましょう」

スタイルのことを置いての言葉だった。

「これからね」

「わかりました、それじゃあ」

「二人でね」

また美奈にリードされて準備体操の後でプールの中に入る。そのうえで泳ぎはじめた。一時間半程泳いでそのうえでプールから出た。プールから出るとだ。また彼女が言ってきた。

「次はね」

「次は？」

「お腹空いたわよね」

今度言ってきたのはこのことだった。

「そうよね」

「ええ、まあ」

「それじゃあね。次はね」

「次はですか」

「食べに行きましょう」

「こう言ってきたのだ。」

「ちょっと。遅くなっただけね」

「あつ、そうですね」

気付けばだ。もう二時だ。昼食の時間は過ぎていた。

「それじゃあ何処に入りますか？」

「いい場所知ってるわ」

美奈はくすりと笑ってこんなことを言ってきた。

「いい場所ね」

「いい場所ですか」

「そこに来ない？」

雄大の顔を見て問う。

第五章

「そこで遅くなっただけれどお昼食べましょう」

「いい場所ですか」

何故いい店と言わないのかが気になった。しかしであった。

美奈の笑顔を見るとだ。彼も頷くしかなかった。その前に美奈のミニスカートとそれと水着姿を見てだ。完全に彼女に参ってしまった。

それで言われるまま連れて行かれる。そこは。

「ここって」

「私の家なの」

マンションだった。雄大の目の前に今度は十階建ての白いマンションがあった。当然その横には美奈も一緒にいる。

「こここの八階よ」

「八階ですか」

「そこで御飯食べましょう」

こう言っただった。さらにだった。

「私が作るから」

「先輩がですか」

「私が料理作るとは思わなかった？」

「いえ、それは」

そこまで考えていないということである。

「そうですね。先輩の」

「いいかしら、私の料理で」

「是非」

好きな相手の手料理、それは戦略兵器である。雄大はその戦略兵器にあがらうことはできなかった。何故なら彼も男だからだ。

「御願います」

「それじゃあね。来て」

「はい、わかりました」

こうしてだった。言われるままそのマンションの八階に入った。エレベーターでの移動の間もずっと美奈が横にいた。そうしてだった。

部屋の中はだ。何と誰もいなかった。二人だけだった。

清楚な何処かログハウスを思わせる部屋の中だった。木の匂いが今にもしそうだ。アンティークな鳩時計にマリモが入った瓶、そういったものが目に入る。

キッチンに案内されて。美奈はすぐにエプロンを着けてそれからブレンオムレツにソーセージを茹でたもの、それとサラダをすぐに作ってきた。あつという間にであった。

それとサンドイッチも出してきた。見ればそれは既に作られていて白い皿の上にあった。中にはハムやレタスに卵があった。

そういったものを出してからだ。美奈は言った。

「簡単なものだけけれど」

「いえ、そんな」

「よかつたら食べて」

こう言って勧めてだ。サンドイッチやオムレツを御馳走する。料理はどれも見事なものだった。しかも量もそれぞれかなりのものだった。

雄大はその味と量に満足した。それからだった。

雄大の向かい側に座っている美奈はだ。また言ってきた。

「あのね」

「あのね？」

「今度来て欲しい場所はね」

何故かだ。ここでは美奈の目は濡れてきていた。

「いいかしら」

「はい、何処ですか？」

「こつちよ」

美奈は席を立ってだ。彼を案内してきた。

そこはだ。ベッドのある部屋だった。机や本棚、筆筒もあるがだ。今の雄大の目にはどうしてもベッドが目に入ってしまうのだった。その部屋の中に入るとだ。美奈はその着ている服を脱いできた。そのうえでだった。

下着姿になった。白いブラとショーツだけだ。下着になると余計にその旨もウエストも目に入る。その姿で告げてきたのである。

「わかるわよね」

「まさか……」

「そう、まさかよ」

「ここでも彼女の目は濡れていた。」

「いいわよね」

「いいわよねって」

「雄大君も」

「こう彼に言うのだった。」

「これからね」

「そりゃ俺も」

「それじゃあ来て」

「また告げた。そうしてだった。」

「彼の手を持って誘う。これがデートのメインになった。」

「ベッドの中でだ。雄大は呆然となっていた。横には美奈がいる。」

「はじめてだったの？」

「実は」

「私もだったけれど」

「美奈もこんなことを言ってきた。」

第六章

「それでもね」

「俺でよかったですか」

「雄大君でないと駄目だったの」

雄大は裸のままだ。しかし美奈は上にあるものを着ていた。白いブラウスをだ。それを着てそのうえで彼の横で上体を起こしていた。絶対だね」

「駄目だったって」

「だって。言っていないかしら」

「言いかしら？」

「好きだから」

美奈の顔が真っ赤になった。

「だからなの」

「俺がですか」

「ほら、やっぱりはじめてはね」

「好きな人と」

「男の子も女の子もそれは同じよね」

その紅に染まっている顔での言葉だ。

「だからなのよ」

「俺と先輩って。それじゃあ」

「一緒よね。だから余計にね」

「俺とだったんですか」

「私でよかったですわよね」

美奈はそのブラウスのまま雄大に問うた。

「その、それで」

「そんな、悪い筈ないじゃないですか」

これが雄大の返答だった。

「だって。俺も先輩のことが」

「好きなのね」

「ですから」

自分から言うにはだ。とても恥ずかしくて言えなかった。

「それで」

「有り難う。それじゃあ」

「はい」

「実は今日お父さんもお母さんも帰ってこないの」

こんなことを告げてきた。

「だからね」

「じゃあ今日は」

「暫く二人でいましょう」

また雄大のその手を掴んできた。

「また来て」

「はい、それじゃあ」

「二人で。いたいから」

こう話してそのうえで二人で過ごすのだった。雄大にとっても美奈にとっても最高のデートになった。これがこの一日だった。

二人の仲はここからより親密になった。そしてだ。

雄大はだ。皆に話していた。

「やっぱりさ。相思相愛ってさ」

「どうなんだよ」

「それが」

「いいよな」

にこにこしながら話す。廊下を歩きながら。廊下は行き交う生徒がかなり多い。普段よりも遥かに多い感じすらそこにはあった。

「やっぱりな」

「何だよ、またおのろけかよ」

「それかよ」

「まあそうなるな」

こう話す彼だった。

「それはな」

「ちえっ、開き直ったよ」

「どうなんだよ」

「それって何なんだよ」

皆彼の言葉を聞いて苦笑いになった。

「全くな」

「いいよな。あんな奇麗な彼女がいて」

「果報者が」

「何処まで幸せなんだよ」

「幸せだよ。それじゃあさ」

「ああ、行くんだな今から」

「そこに」

こっつ皆から言った。

第七章

「その先輩のところに」

「当然の流れで」

「ああ、当然だよ」

「ここでも開き直る雄大だった。」

「行かなくてどうするんだよ」

「どうもしないよ」

「なあ」

「全然な」

皆ここでは一旦突き放した。

「俺達は付き添いだからな」

「ただのな」

「お目当てがあるのは御前だけ」

「先輩のクラスだからな」

「まあそれでもいいじゃないか」

雄大はにこにこしたままであった。

「悪い場所じゃないんだからな」

「学校の文化祭でそんな悪い場所があるか」

「あつてたまるか」

これが彼等の反論だった。

「健全に決まってるだろ」

「不健全だったら先生が来るだろ」

「それでもあれはぎりぎりだろ」

ふと一人がこんなことを言った。

「どう考えてもな」

「ぎりぎりか？」

「メイド喫茶はやばいんじゃないか？」

これが彼の主張だった。

「やっぱりな」

「そうか？」

「そうだろ。やばいだろ」

「俺は別にそうは思わないけれどな」

雄大は首を傾げさせながら述べた。

「そこまではな」

「まあ御前がそう思うんならそれでいいけれどな」

彼は雄大にはこう言うに留めた。

「どっちにしても行くんだしな」

「行かないと一生後悔するからな」

大袈裟なことも言った。

「だから目の前にゴルゴ13がいても行くぞ」

「メイド姿のゴルゴ13がいてもか？」

「しかも下着は白ブリーフのままだ」

ゴルゴ13といえば白ブリーフであった。尚この面々の下着は全員トランクスかボクサーパンツだ。雄大はトランクスを愛用していたりする。

「それでも行くか？」

「そんなのがいても」

「ああ、行くさ」

見事に言い切った雄大だった。

「だってな。最後にはな」

「あの人がいるからだよな」

「やっぱり」

「そうだよ。それじゃあな」

廊下の門を曲がった。そのすぐだった。

そこにメイド喫茶があった。そここそはだ。

「ここだよ」

「ああ、ここだよな」

「この教室だよな」

今は教室ではなかった。看板には堂々とだ。メイド喫茶と書いてあった。

「先輩のクラス」

「確かな」

「うん、ここだよ」

雄大もその通りだと答える。

「このクラスにいるから」

「それでメイドやってるんだよな」6

「あのスタイルで」

「さあ、見に行こうか」

雄大は上機嫌で皆に話した。

「これからね」

「おい、飲みに行くんだろ？」

「食べにな」

皆は一応こう返した。

「喫茶店だからな」

「飲まないで何するんだよ」

「そうだよな」

「そうだよ。飲んで食べるよ」

一応はこう答える雄大だった。

「ちゃんとね」

「何だ、わかってるのか」

「流石にちよつとはな」

「わかってるんだな」

皆少しだけほっとしようとした。しかしだった。

「先輩の作ったお茶やお菓子をね」

「やれやれ。そう言うか」

「わかったと思ったら」

「やっぱりそうか」

「だって先輩がいるんだよ」

ここに尽きた。全てはだ。

「それで何で飲まないで食べないでいくんだよ」

「やれやれ。のろけは続くな」

「本当にな」

「何処まで続くやら」

「いらつしやいませ」

雄大は呆れる彼等を他所に教室の扉を開いた。するとすぐに声がかかってきた。

「御主人様、お帰りなさい」

「はい、只今」

そこには白いエプロンに短い丈の黒いメイド服と白のカチューシヤ姿の美奈がいた。雄大はその彼女を見て満面の笑みになった。その姿の彼女もまた。彼を悩殺し心まで溶かしてしまった。

大和撫子七変化 完

2010・8・9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8952p/>

大和撫子七変化

2011年1月2日21時55分発行